

「原爆音楽」の源流、大木正夫作曲

「交響的幻想曲ヒロシマ 原爆の凶に寄せて」の初演音源発見。

- ① 62年間、TBSの倉庫に眠っていたもの。初演録音の存在は、知られていなかった。
- ② 大木は、戦時下の翼賛作曲家。放送の冒頭で「恥じている」と自己批判。
- ③ 「原爆の凶に寄せて」の自筆楽譜の表紙に強烈なメッセージを表明。
「原爆被害の実相を伝えることは、日本人の人類に対する義務」
- ④ 原爆被害の実相を管弦楽の大曲、全8楽章にわたる沈痛な音楽で伝えようとした。
- ⑤ 当時の担当ディレクターが当時を述懐し語る。
「二度と戦争をしてはいけないということを感じる。そのための音楽である。」
- ⑥ 年内に片山杜秀の監修、解説で日本コロムビアからCDリリースの予定

原爆被害の実相は世界の目の前に全く蓋い隠されている。
この実相を人類の一人残らずに知らせる事は今日生を興へ
られた日本人の人類に対する義務である。
この実相を識らずして人類が自らの明日の運命を決定する
事は悲劇である。
この実相を識った上で賢の道を撰ぶか愚の道を撰ぶかは
人類全体の責任である。

原爆被害の実相は、世界の目の前に全く蓋い隠されている。その実相を人類の一人残らずに知らせることは、今日生を興へられた日本人の人類に対する義務である。その実相を識らずして人類が自らの明日の運命を決定することは悲劇である。その実相を識った上で賢の道を撰ぶか愚の道を撰ぶかは人類全体の責任である。(自筆原譜表紙に書き込まれた大木正夫の言葉)



大木正夫(1901-1971) 静岡県磐田郡中泉町(現磐田市)に生まれ。戦前の作風は民族的でロマン主義。代表作『5つのお話』『夜の思想』はワインガルトナー賞の特賞を受賞した。戦時下では、翼賛的姿勢。皇紀2600年祝典楽曲や戦意高揚作品を多数作曲《勇士の名を賑はむことを慕ふ歌》《国民総進軍》《大東亜戦争行進曲 勝鬨の歌》《管弦楽序曲 みたみわれ》満州国委嘱の《交響詩 蒙古》では、朝比奈隆と共に満州国へ渡り、朝比奈と新京交響楽団により演奏され、現地で人気を博した。戦後は明確な左派の政治的立場を取るようになり、楽壇からは距離を置きひっそりと活動。「原爆の凶に寄せて」は、加筆修正され交響曲第5番『ヒロシマ』となる。カンタータ『人間をかえせ』、交響曲第6番『ベトナム』などメッセージの強い作品を残した。

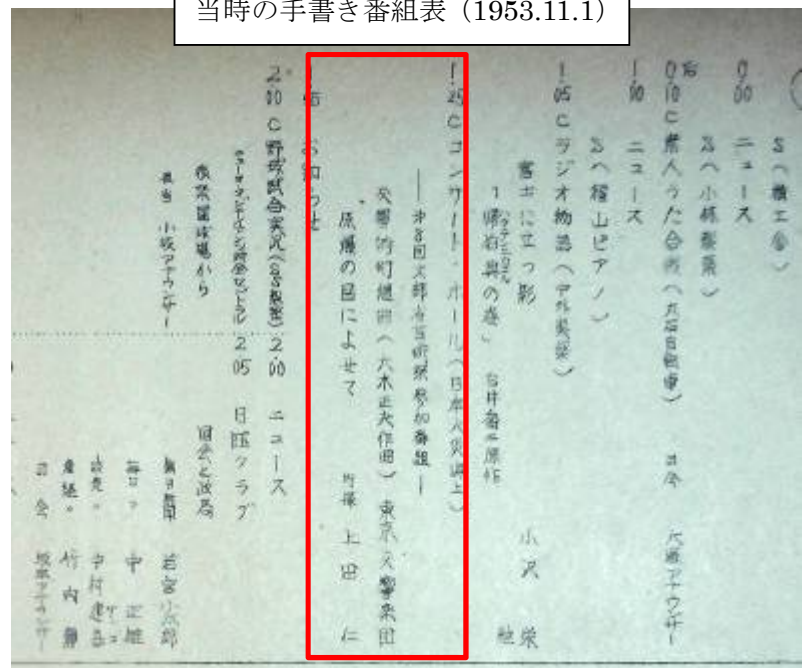
① 発見の概要

TBS ヴィンテージクラシックス <http://www.tbs.co.jp/tbs-vintage-classics/> 班が社内に保管されていた音源の内容を精査し、確認。元は 15 インチのオープンリールテープ。現在は、デジタルファイル化済み。収録時間 29 分 19 秒。上田仁 指揮 東京交響楽団演奏。日比谷公会堂。

1953 年（昭和 28 年）11 月 1 日 午後 1 時 25 分、ラジオ東京の音楽番組「コンサートホール」にて放送したもの。その後放送された痕跡がなく音源は 62 年間眠っていた。

放送では、「原爆の図によせて」としているが自筆楽譜では、「原爆の図に寄する」となっている。その後、加筆改稿され「交響曲第 5 番ヒロシマ」となる。戦後 60 年の 2005 年に湯浅卓雄指揮、新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏で再演され、「世界初録音」を銘打って CD 化された。ナクソス社 8.557839J。その頃は、TBS の初演が録音され残っていることが知られていなかった。2006 年に「ヒロシマと音楽」委員会が「原爆音楽」といわれる原爆をテーマにした音楽 1800 曲あまりについて調査し「ヒロシマと音楽」という書籍を出版した。同書には、「原爆の図に寄せて」の記述がない。同委員会の委員長能登原由美さんは、「その当時は、『交響的幻想曲ヒロシマ原爆の図に寄せて』の初演が残されていたことを知らなかった」と述べている。

当時の手書き番組表（1953.11.1）



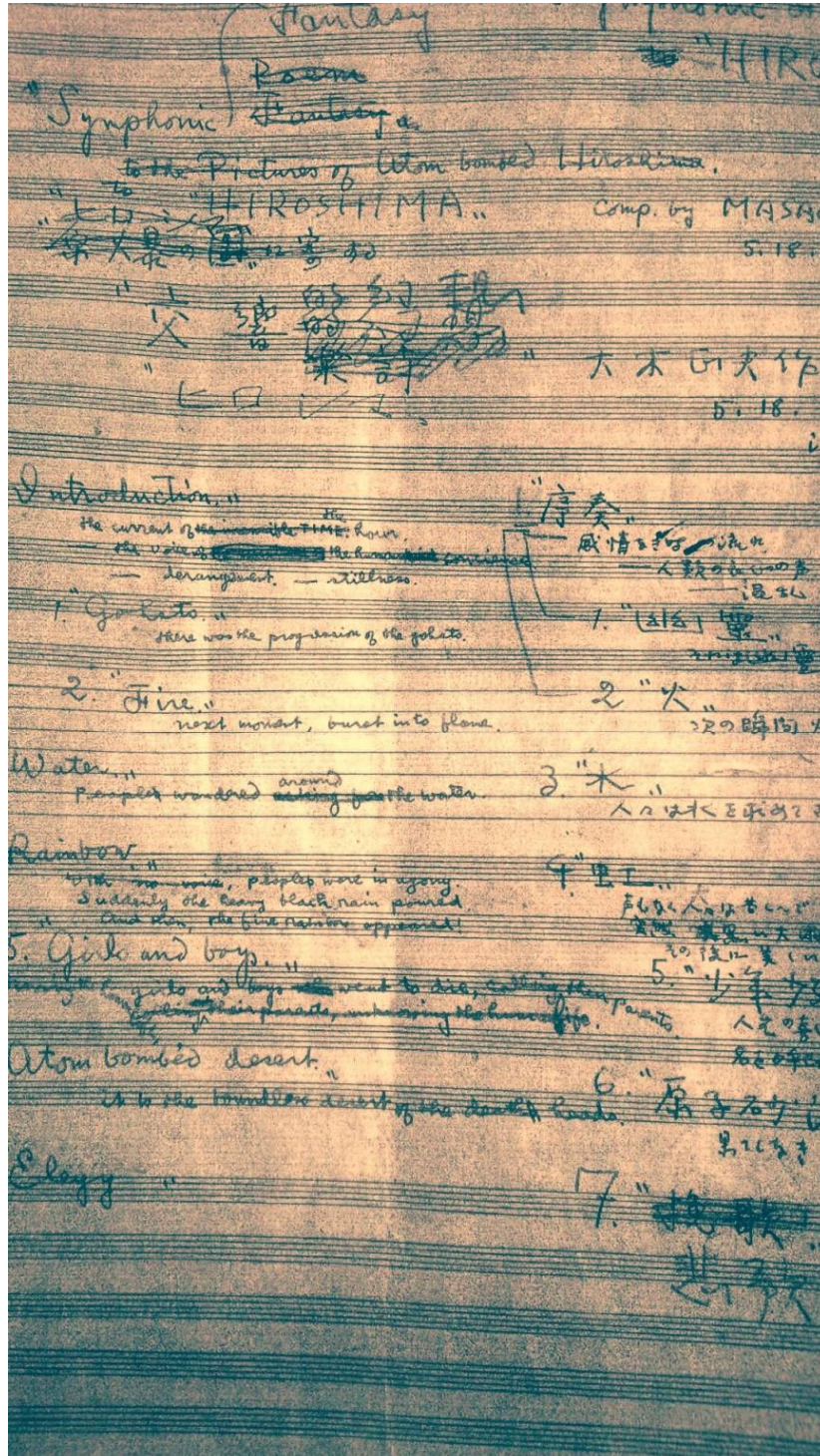
② 「恥じている」大木正夫の自己批判

大木正夫は、この放送に先立って戦時下において戦意高揚音楽を多々作曲していたことを自己批判し、放送された。以下がそのコメントである。

・・・この新しい音楽は、過去への葬送曲です。新しい音楽を創る前に過去を総決算しなければならないのです。世界から隔離された日本にあって、私は、戦争に対しての批判が誠に中途半端でした。私は、そのことを今も恥じています。毎日／＼芋ばかり喰らって水脹れした脳味噌からは、まっとうな叡智が消えうせていました。今日、ここに赤児のように生まれ変わった私がおります。・・・

③楽譜の表紙に大木正夫の強烈なメッセージが書き込まれていた

原爆被害の実相は、世界の目の前に全く蓋い隠されている。その実相を人類の一人残らずに知らせることは、今日生を興へられた日本人の人類に対する義務である。その実相を識らずして人類が自らの明日の運命を決定することは悲劇である。その実相を識った上で賢の道を選ぶか愚の道を選ぶかは人類全体の責任である。



自筆の楽譜は、何箇所にもわたって書き直されている。タイトルが何度も変更されている。楽曲自体も改訂の痕跡が散見される。大木の創作の苦しみや心理的葛藤をあらわしているように見える。ベートーヴェンの自筆譜の如く。

④ 原爆被害の実相を管弦楽の大曲、全 8 楽章にわたる沈痛な音楽で伝えようとした。

(放送では、第 5 楽章「虹」がカットされている。そのため放送上は、7 楽章である。)

アナウンサーの声。静かに読む。＜11 月 1 日、午後 1 時 25 分から 1 時 56 分まで。31 分間放送の「コンサート ホール」です。＞オーボエがラの音を吹く。ヴァイオリンが合わせる。金管も低音弦楽器も次々に合わせる。諸音が入り交じる。チューニングの響きが気分と期待を高める。＜11 月第一週の今日は、第 8 回文部省芸術祭参加の大木正夫作曲「交響的幻想曲原爆の凶に寄せて」を上田仁さん指揮、東京交響楽団の演奏でお送りいたします。まず序奏。無神経な時の流れ・人類の良心の声・混乱・静寂。続けてお送りいたします。＞

楽譜には、“prelude”と記されている。導入としての前奏曲である。楽譜では、pp とはじまる。ピアノシモ、ごく弱く。楽譜最下段、コントラバスの音符が密集している。ピッツィカートである。坦々と撥弦する。その冷淡さが空恐ろしく心を搔き毟る。大太鼓、ドンドンと鳴る。不安を逆撫でする。ヒュウヒュウヒュウとヴァイオリンが哀しい旋律を弾く。クラリネットとフルートも禍々しく詠う。＜無神経な時の流れ＞は、丁度 2 分で仕上がる。チェロが古老のように語り掛ける。コントラバス添う。諫めるように。ベートーヴェンの第 9、第 4 楽章のあれである。管弦楽がなつかしく、前楽章を回想するのを低弦のレチタティーヴォが否定する。大木は、＜人類の良心の声＞と名づけた。「良心」の語りかけは、いたって短い。35 秒のパスエイジョン。つまり、人類の無力を表わす。押しとどめようも無く運命が押し寄せる。トゥッティ＝全奏だ。フォルテで全ての楽器ががなりたてる。＜混乱＞と大木が名づけた。30 秒の音楽的カオス。何を描写しているのか。1945 年、8 月 6 日、8 時 15 分。他ならない、その瞬間のことである。そしてチェレスタが透明で冷たい音を鳴らす。＜静寂＞である。

3 分 10 秒ほどの序奏。そしていよいよ音楽は、「原爆の凶」そのものを写しとる。まず「原爆の凶」第一作の「幽霊」。かの有名な。世界的絵画である。丸木夫妻の。丸木位里は、太田川の里に生まれた。上京して水墨画による前衛画家となった。原爆のあの日、丸木は東京にいた。「新型爆弾」投下と聞く。列車を乗り継ぎ、広島へ駆けつける。三日後、生き地獄を視る。叔父、姪を即座に失い、半年後、父をも原爆症に失う。妻、俊も入市被爆する。死線を喘ぎ、夫妻は、居を移した。空気のよい湘南片瀬で療養する。その裡に画魂沸き出でた。目撃者として、証言者として、表現者として、芸術家として、神的な命を感じた。夫妻は、筆を取った。位里は、水墨の毛筆を、俊は、洋画の絵筆を。俊の精密なデッサンに、位里が墨をぶちまける。手段は異なるが目的は同じ。死者と瀕死のものたちの視線から描く。凝視した残虐を絵画にとどめる。水墨と油彩、水と油が衝突し、タナトスを描きながら、エロスとアガペーに満ちている。悪魔の所業を難じ、弾じながらも、絶望することなくどこかに希望を見ている。死屍累々だが微かに気韻生動する、摩訶不思議な美術作品が生まれていった。1950 年 2 月、占領下の東京で第一作が公開された。「原爆の凶」というタイトルは、展覧会の主催者が「8 月 6 日」と変えた。GHQ は、厳しいプレスコードを課していた。日本人には、同胞の原爆被害を伝える自由が無かった。

「原爆の凶」第 1 作＜幽霊＞には、丸木夫妻による解説が付いている。＜それは幽霊の行列。一瞬にして着物は燃え落ち、手や顔や胸はふくれ、むらさき色の水ぶくれはやがて破れて、皮膚はぼろのようにたれさがった。

手をなかばあげてそれは幽霊の行列。破れた皮を引きながら力つきて人々は倒れ、重なりあつてうめき、死んでいったのであります。＞想像の産物ではない。事実を伝える絵画であった。丸木夫妻は、「芸術」に名を借りて、日本ではじめて目撃者として被害の実相を本格的に伝えた。弩級のスクープニュースと言える。日本で新聞や雑誌が正面から原爆の被害を報じたのは、「原爆の凶」

から2年後、1952年8月6日である。「アサヒグラフ」の編集長、飯沢匡は、講和条約が発効するのを待った。独立から三ヶ月後、飯沢は、意を決して被害写真を一挙に掲載した。ほとんどの日本人は、はじめてそのむごたらしい惨状を眼にした。投下から7年も経っていた。

作曲家大木正夫は、<原爆の図>を見た。暫し呆然とした。悪夢を見ていると思った。我に返ると楽譜に向かった。大木は、楽譜に大文字で強く GHOSTS と書き込んだ。複数形である。交響的幻想「原爆の図に寄せて」の第2楽章は、<幽霊>。ヴァイオリンとヴィオラが不気味にのたうつ。いてえよー、くるしいよー。しにたくねえよー。トランペットが地獄への行進を吹き上げる。三途の川はこっちだぞー。おめえの命をもらったぞ。脈が乱れる。呼吸が荒れる。太鼓、激しく打つ。命が次々に消えてゆく。「原爆の図」に寄せて、第3楽章<火>。原爆投下後に広島市内を焼き尽くした炎。親指と中指が黒鍵、白鍵を横殴りに^舞踊る。激しいグリッサンドで紅蓮の猛火を描いた。第4楽章<水>。水を求めて彷徨った人々。和声的な調和は、どこにもない。瀕死の苦悶を金管楽器が不協和音に吹いた。第5楽章<少年少女>。流れに沿って、累々と子供たちが死んでいる。それを視る丸木の心は泣いている。大木正夫は、それを感じ取った。フルートの独奏が哀悼する。そして第6楽章<原子砂漠>。死体にうじがわく。はえが群がる。髑髏、髑髏。屍のにおいが漂う。高音の金管が ff に吹く。大木の慟哭、人間の怒り。調性をかなぐり捨てる。諸音入り乱れる。第七楽章<終曲>。暗澹たる黙示。原爆競争の行く末、不吉なハルマゲドンを警告している。

⑤ 当時の担当ディレクターが当時を述懐し語る。

「二度と戦争をしてはいけないということを感じる。そのための音楽である。」

「眼をそむけたね。しかし、立ち去れなかった。しばしその場にたたずんだね。」

ラジオ東京音楽部員の岡本公夫(87)は、「原爆の図」をはじめてみたときの衝撃を忘れていない。「死体に近い人々の群れだろう。よくぞこんなむごい様を描くと思ったね。皮膚がぼろ切れのようになって垂れ下がっている。」

大木正夫が交響的幻想「原爆の図に寄せて」を書き上げたのが1953年5月。それから、ラジオ東京の音楽番組「コンサート ホール」のプロデューサー岡本公夫は、指揮者上田仁と綿密に音作りを打ち合わせた。「ぼろぼろになるほど神経を使った」という。「原爆の図」は、譜面に置き換えられた。しかし、それはありきたりの音楽ではなかった。不協和音だらけの凄絶な現代音楽だった。東京 芝公園の練習場で何度も練習を重ねた。東京交響楽団の俄かづくりのバラックだった。その上をしばしば米軍の航空機が横切った。爆音のたびに音楽は、中断した。独立を果たしたものの東京に米軍は駐留し、基地は各地で拡張されようとしていた。GIが闊歩する光景は、占領中とさして変わらなかった。

岡本公夫は、あの夏、福岡の陸軍航空通信隊で気象小隊を率いていた。5月には、焼夷弾の空襲で配下の隊員18名を失った。8月6日。ヒロシマについては、全く何も知らなかった。しかし、8月9日、午前11時。岡本は、泥まみれになって「たこつぼ」を掘っていた。一人用の塹壕である。墓穴のようでもある。と、西南の空に凄まじい光を見た。世界が突然真っ白になった。きのこ雲は、見えなかった。しかし、何か、とてつもないことが起きたと兵士の直観で感じていた。

数日後に敗戦となった。小隊は解散。下関から乗り継いだ復員列車は、広島駅を通過した。止まることはなかった。その時、すべての車窓に鎧戸が降ろされた。どこからか生暖かい風が吹き、焼け焦げた匂いが漂った。隙間から一面の焼け野原がちらりと覗いた。丸木位里は、後にこの無残な荒涼を「原子砂漠」と呼んだ。

2015年、原爆投下から70年のこの夏、「原爆の図」は、海を渡った。ワシントンのアメリカ

ン大学で6月13日から「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」がはじまった。その会場に「原爆の図」の「幽霊」や「火」など代表的な6作品が展示され、脚光を浴びている。8月6日のその日も、アメリカの人々は、それを見る。岡本公夫は、はじめて「原爆の図」をみたときの涙を思い起こす。その絵から生まれた音楽を運命的に担当した。その音楽にどんな意味があったのか。岡本に尋ねる。「二度と戦争をしてはいけないということを感じる。そのための音楽なのだ。」世界は、正気を取り戻さなくてはならない。岡本公夫は、そう思っている。

.....
なお、なお、この音源は、音楽評論の重鎮・片山杜秀氏の監修・解説で日本コロムビアより発売が予定されているCD「戦後日本人作曲家発掘集成～TBS ヴィンテージジャパン～」(仮題)の中に収録される。

担当 TBS ヴィンテージクラシックス エグゼクティブプロデューサー 小島英人
03-5571-2418 携帯 090-7194-2278 メール ferrari@best.tbs.co.jp